

京城だより④『定本久生十蘭全集』未収録資料紹介 ：「”酒の害”について」、「激流」を中心に

巖, 基権
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/27415>

出版情報 : 九大日文. 20, pp.23-33, 2012-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

京城だより④

『定本久生十蘭全集』未収録

資料紹介

——「酒の害」について、「激流」を中心に——

はじめに

巖 イワノ
基権 キケン

「京城日報」には久生十蘭作の小説が二編掲載されている。「激流」（「京城日報」昭和十四年一〇月二〇日）昭和十五年二月三日／全二六回」という長編小説と「探偵小説」酒の害」について」（「京城日報」昭和十五年一月一八、一九、二二日／全三回）」という短編小説がそれである。

現在刊行中の『定本久生十蘭全集』（国書刊行会、平成一九年一〇月九日）刊行中、『全集』と略す）には、この二つの作品と同じタイトルの小説は見当たらない。しかし、『全集』四巻には「女性の力」という長編小説が収録されていて、その内容は「京城日報」の「激流」と一致している。『全集』解題には、「女性の力」の初出を、「昭和十五年（一九四〇）十一月、博文館より書き下ろしで（小説選集）の一冊として刊行」と記されているが、正しくは、外地で発行されていた「京城日報」がその初出となる。ただし、その作品の本文の構成は、「京城日報」掲載

時の一二六回に、さらに六回分を書き加えたものとなっている。

また「探偵小説」酒の害」について」も、『全集』や他の研究書などの年譜にも、そのタイトルが見当たらない作品である。その概要は、以下の通りである。ある霜のひどい朝、タクシー運転手の死体が見つかる。その現場には七人の野次馬が集まっている。通りかかっていた木谷道夫は、殺人者は必ず現場に戻ってくるというある博士の「殺人論」を思い出しながら、その七人を疑い始める。しかし、捜査の協力のため、警察署に行った木谷は逆に犯人として疑われる。木谷は断然と嫌疑を否定するが、警察署で差し出されたお酒を飲んでから、実は自分が昨夜帰りに酔っぱらってタクシー運転手と喧嘩し、殺害したことを思いだし、罪を認めるというあらすじとなっている。

『全集』未収録の作品だが、実はこの短編小説は、外地の新聞である「京城日報」に掲載の後、内地の新聞にも掲載されていた。森英一作成の「北国新聞」文芸関係記事年表稿（昭和篇4）（「金沢大学教育学部紀要 人文科学社会科学編37」昭和六三年二月、以下「年表稿」）には、石川県で発行されていた「北国新聞」に、五回に渡って連載されていたことが確認できる。昭和一五年二月九日から一〇、一一、一三、一四日まで、それぞれ「探偵小説 酒害をめぐって」、「探偵小説 酒の害悪をめぐって」、「探偵小説 酒の害悪を繞つて」、「探偵小説 酒の害悪を繞つて」というタイトルで連載されている。連載日から確認できるように、内地の新聞より半月ほど早い時期に、外地の新聞に連載されていたことがわかる。

昭和四年から八年までフランスに留学した久生十蘭は、フランス留学体験から題材を得た小説を数多く執筆している。また、戦中には海軍報道班員として南方に赴き、日記や南方を舞台にした小説などを残している。今回本稿で紹介する「京城日報」に掲載されていた二つの作品は、内容的には朝鮮との直接的な関係は認められないにしても、久生十蘭が昭和一四年から一五年の間、内地の雑誌だけではなく、外地の新聞にも作品を寄せていたという、彼の創作活動の新たな一側面を見せてくれる貴重な資料になると考える。

それではまず、「激流」の広告文を紹介する。資料及び作品の翻刻にあたっては、本文表記は原則として原文に従った。漢字は可能な限り、原文そのままの旧字体で、仮名遣いも歴史的仮名遣いで表記した。なお、活字がつぶれ、判読困難な文字は「■」で記した。

「激流」の広告文と作品の内容について

次の本紙朝刊新小説

「激流」作者 久生十蘭 挿畫 伊勢良夫⁽¹⁾

讀者諸君から多大の好評を頂いた尾崎士郎作、高木清挿畫の「空に残れる」は近く完結することになりましたので本社では次の小説に就て■■■■■中のところ、我國文壇の新進作家久生十蘭氏作の「激流」と決定しました、伊勢良夫氏の挿畫と共に必

ずや讀者各位の御満足を得るものと確信致します。

作者の言葉

これは、眞實に徹し、汚穢にまみれた生活の中に、瀆れなき純粹の愛を貫いて生きようとする若き女性の悲壯な■■■である。人生の激流に押し流されながら、苦惱の浪々と闘つてこれに乗切らうとする慘澹たる相を描き、その高く悲しく美しき心情を刺すところなくつたへようと思ふ。

この偉大なる困難な時代に際會し、眞實と愛と連帯心だけが我々の精神の低落を支へ生活することの希望を與へてくれると思はれるとき、この眞摯な題材と眞劍に四つに組んで見ようと思ふ、倅ひに、讀者諸賢の御支援を得ば、これに過ぎる喜びはない。

畫家の言葉

この度光榮ある本紙に再登場の機會を恵まれましたことは感激に堪へません。

願はくば新しき感覺に充てる作品の近代的性格を傷つくるなからんことを私かに念じつゝ筆を一洗して大いに張り切つてゐます。

讀者諸君の支持と聲援を期待して止みません。【寫眞〓打合せ中の久生十蘭氏〓右と伊勢良夫氏〓左】

〔京城日報〕昭和一四年一〇月一三日朝刊七面

「京城日報」に、昭和一四年一〇月二〇日から翌年の昭和一五年二月二三日まで総一二六回に渡って連載された「激流」は、昭和一五年に博文館から『女性の力』というタイトルで出版される。数カ所に本文の異同は見られるが、話の筋は同じである。主人公の真波は、長崎の島原にあるミッシヨンスクールでの一七年間の生活を後にし、唯一の伯母である馨子の招待に応じて、東京に向かう。一方、東京では同じミッシヨンスクール出身の幸子の兄清次郎が、失恋のために自殺するという事件が起きる。復讐を誓う幸子と自分の好きな男(冬彦)を真波と結婚させようとする馨子など、様々な男女の錯綜した関係の有様が描かれている長編小説である。

初出の「京城日報」では、真波が冬彦から逃れようとして窓から飛び降りる場面(第二六回)で締め括られているが、単行本ではその後日談が書き加えられた形となっている。また、初出と単行本では章立ての違いも見られる。「京城日報」連載時の章立てと、昭和一五年に単行本化された『女性の力』を底本とする『全集』第四巻に収録された作品のその章立ては、以下の通りである。

○初出——「出発」(二〇二)、
「冬薔薇と鷺」(二〇三)、
「落葉の記」(二〇七)、
「鬨志」(二〇八)、
「晚餐」(二〇九)、
「疑惑」(二一〇)、
「温室の中」(二一八)、
「四人の客」(二一九)、
「即興曲」(二二二)、
「椿貞三」(二二二)、
「代理の力」(二二五)、
「愛着」(二二六)、
「女性の力」(二二〇)

●『全集』——「出発」(二〇五)、
「屈託のない人」(二〇七)、
「冬薔薇」(二〇七)、
「唾娘」(二〇六)、
「落葉の記」(二〇七)、
「鬨志」(二〇八)、
「宣言」(二〇六)、
「晚餐」(二〇七)、
「同行」(二〇五)、
「疑惑」(二〇七)、
「温室の中」(二〇八)、
「四人の客」(二一九)、
「即興曲」(二一六)、
「茨の道」(二一六)、
「再会」(二二六)、
「炎の街」(二二五)、
「代理人の人」(二二五)、
「愛執」(二二六)、
「日記帳」(二二八)、
「信愛」(二二八)

初出が全一二六回であるのに対して、単行本収録の際には一三二回分の分量となっている。単行本化された時に多少推敲の跡が見られるが、内容的にはそれほど大きな相違点は認められない。初出の「女性の力」(一九)と単行本の「信愛」(二)まで、その内容はほぼ同じである。しかし、単行本には初出にはなかった「信愛」(二)が挿入され、その後初出の最終回にあたる「信愛」(三)と新しく「信愛」(四〇八)が書き加えられている。つまり、初出の際にはなかった「信愛」(二)と「信愛」(四〇八)という六回分が単行本に加筆されたわけである。その他にも初出では、真波が上京する際汽車の中で出会った同じ孤児出身の「椿貞三」という男の名前が『全集』では「菅直記」と変更されている。

戦後の昭和二三年に「読売新聞」に発表された「ココニ泉あり」の連載前の予告記事「次の連載小説」(三月二日)には、「新聞小説に初めて筆をとる久生氏は他の一切の執筆を絶つて構想三ヶ月、日本文壇に一大波紋を投ずべき新しき」百万人の文学

「を揚げて登場する」という紹介文があり、『全集』解題もその記事が引かれている。しかし、本稿でこれまで見てきたように、久生十蘭は戦前から、しかも外地新聞の「京城日報」上で、新聞連載小説の執筆活動を行ってきたのである。続いて、「探偵小説」酒の害について」全文を掲載する。

『定本久生十蘭全集』未収録作品

探偵小説 「酒の害」について（上）

久生十蘭

霜のひどい朝で、地面にまばらに生えてゐる短い草の葉が一本づつ霜でしやつきり立つてゐる。

まだ朝が早く、戸山ヶ原の射塚後の混凝土の高い塀の上に朝日がしかけてゐた。

男は赫土の上に頬をおしつけ、左腕を腰の方へ折り曲げるやうにして俯伏せに倒れてゐた。ほんのくぼに、霜が光つてゐた。何か角のある石のやうなものでこつぴどくぶツ叩かれたのらしく顛顛のころの皮膚が捻じけ、そこから流れ出した血が一寸ほどの幅で赤いリボンのやうに頬の方へ垂れさがつてゐる。

濃い鼠と黒の、目のつんだ格子織の服を着、帽子はかぶつての手の小指に下司張つた銀指環を嵌めてゐる。帽子はかぶつてゐず、ノオ・ネクタイに板裏といふ風態で、ひと眼でタキシ一の運轉手だといふことがわかる。

いま言つたやうに、まだ朝が早く、それに、道路から少しひつ込んだところなので、たいした人集りはしてゐない。御用聞

きや、豆腐屋や、牛乳配達や、よなげや、前に行く棟梁や、そんな風な早起きの連中が七人ばかり、すこし小高くなつたところに立つて、遠くからおづおづと眺めてゐる。

木谷道夫は、さういふてあひの後に懐手をしながら突つ立つてゐた。

死體なんてえものを見たのはこれが最初だったので、こゝに倒れてゐるこの男が、すつかり絶命してゐるなぞといふは、なにか納得ゆきかねるやうな氣持だつた。

かうしてゐるうちに、頭へ手をやりながら、あゝ、とか何んとかいひながら、むつくり起き上つてきさうでしやうがない。

見てゐる方の連中も、一向のんきなもので、喧嘩でもしたのだらうかの、ぶつくらけえつて切石に頭をメリ込ませたのだらうかのと極く月並のことを言ひ合つてゐる。

木谷の家は、技術本部の傍にあるので、飲みすぎて胃の腑が重い翌朝などはきまりのやうに、この原ツぱをひと廻り散歩することにしてゐる。

昨夜も銀座裏でさんざんに飲んだくれ、泥酔したときの癖で、いやにこつ早く眼をさまし宿酸のだぶつく胃袋をさすりながらモモダしてゐたが、どうにもをさまりがつかなくなつたので、フラフラと起き上り、足をかちかませてこゝまでやつて來ると、この始ダだつた。

一瞥した當座は、なんだか穢らはしいやうでまともに眼を向ける氣もしなかつたが、そのうちにだん／＼慣れて來て、眼の隅からチロ／＼眺めながら棟梁の空言に平氣で合槌が打てるやう

になつた。

木谷は、いつか法醫學教室で何やらいふ博士の「殺人論」といふ講演をきいたことがあつた。それを、フト思ひ出した。

講演のすぢは、だいたいこんなものだつた。
殺人者の良心といふ條で、伊太利のフエリといふ學者の説だといつて、「殺人者の特徴の一つは、犯行の場所へ戻つて來ることである」——つまり、殺人者は兇行の場所や被害者の死體に、うち克つことのできぬ力でひきよせられるものだといふのである。

その例として、ドフトエフスキーの「罪と罰」の中で、刑事がラスコルニコフスキーにそれとなくいひかける言葉を引證したので、興味深く思つてそれを記憶してゐた。

「……ねえ君、ちやうど夏虫が火の周りを幾度もぐる／＼廻つて、しまひにその中に飛び込んで焼け死ぬやうに、今度の犯人も、この町を逃げ出せるわけはなく、そのうちにこちらの手の中へ飛び込んで來るのさ」

さういふ思ひで眺めると、この七人の中にたしかに加害者がゐるやうな氣がする。なんとなく面白くなつて來た。

順々に眺めわたす。

ひよつとすると、この獅子嚙んだ、ひしやけたやうな顔をした地見がさうなのかも知れない。さつきから、一言もいはずにむつりしてゐるのが氣にかかる。いや、のつべりした、ひどく哥兄ぶつた棟梁も怪しい。さつきから何んだかんだと口をおかずに喋言くつてばかりゐるのが妙だ。そのやうすに、如何に

も取つてつけたやうな不自然なところがある。(「京城日報」昭和
一五年一月一八日夕刊四面)

(中)

その氣で見れば、自轉車に凭れてゐる御用聞の方だつて怪しいことだらけだ。多分昨夜から寝なかつたのだらう。眼が血走つて、唇などは土氣色をしてゐる。まさに、良心の呵責に堪へきれぬといつた風である。……こんなことをしてゐるうちに、すつかりこんがらがつて、何がなんだかわからなくなつてしまつた。

しかし、折角やりかけたことだから、なんとかして看破してやりたいやうな氣がする。自分で殺して置いて、そこへ來て眺めてゐるなんてえのは、實に太い話である。ムラムラとして、眼にモノを見せてやりたくなつた。(畜生め、白々しいにもほどがある)尤も、その氣になればその位なことを洞察するのはわけのないことのやうに思はれる。

アンドレアス・ピエルの「犯罪心理學研究」の中にかういふ一章がある。

誰でも犯罪を行つた者は捜査の經過を熱烈な緊張をもつて眺めてゐるもので、もし探偵が誤つた方向を進むときは喜びの色を現はしもし嫌疑が自分の方に向つて來ると心配のために蒼ざめる。……

いづれにしろ、こゝに立つて眺めてゐるからには、どんな風に檢視が行はれるか見たいといふ誘惑にうち克つことはできま

い。とすると、検視が終るまでこゝを離れない奴がそれだといふことになる。木谷は、腰を据ゑてとつくりと最後まで見届け、確かにそれと見分けがついたら、刑事にでも耳打ちしてやらうと決心した。

そのうちに、御用聞と地見と二人連れの學生が行つてしまつて、土工と哥兄と近所の隠居らしい山羊髯の三人が残つた。

隠居にこんな藝當ができさうもないのだから、残るところ加害者はこの二人のうちといふことになつた。ところで哥兄の方は今になつてもまだ口を休めずに盛んに取つてつけたやうな駄洒落を飛ばしてゐる。

それから十分ほどたつと、検視の連中が草地の向ふで自動車を停め、四人前後になつてドヤドヤと乗込んで來た。

土工の方は、それを見ると、氣がなささうにテクテクと原ツばから出て行つてしまつた。

いよいよ哥兄だといふことになつた。(こゝに、人殺しがある!) 咽喉の奥の方がムツムツして、今にも大きな聲で叫び出しさうでやり切れない。

刑事らしいのが一人、煙草に火をつけながら、ブラブラやつてきた。意地にも我慢にもやり切れなくなつて、自分からその方へよつて行つた。

「……實はね、私はさつきから見てゐたんだが、あの土工らしいのが確に加害者です。うはずつたやうな顔をして、それに、どうもすこし喋言りすぎるやうだ……フエリ博士の説によると、犯人は必ず現場へ戻つて來るといふことですがつまり、あいつ

はさういふ定理に従つてこゝへやつてきたのにちがひない。だいいち……」

刑事は木谷の顔を眺めながら、ふむふむ、とうなづいてゐたが、「面白さうな話ぢやないか。一緒に署へ來てくはしく聞かせてくれよ。手問ア取らせないから」

「いゝですとも、捜査に協力するのは市民の義務ですからねえ」
〔京城日報〕昭和十五年一月一九日夕刊四面

(下)

司法主任の前でもう一度やつてくれといふから、最初からの經緯を縷々と述べ立てた。

司法主任はひどい酒鼻で、仕事がなかつたら朝からでも飲みたいやうな顔をしてゐる。

これもまた半眼といつたぐあひに眼を閉ぢながら、ほうほうと聞いているたが、木谷の一席が終ると途方もないことをいひだした。

「いろいろ伺つたが、殺つたのは實は、君ぢやないのかね」
木谷は吃驚敗亡して、

「じよ、じよ、冗談ぢやない。そんなのツてありますか。あたしはあなたたちに協力してる側なんですぜ」

「それはわかつてゐるが、君の右の耳の上についてゐる血は、いつたい、どうしたんだね？」

思はず手をやつて、
「へえ、血なんぞついてゐますかまるツきり覺えがありません」

「覚えがないといふのはどういふ意味だね」

「實ア、昨夜はたいへんな深酔でどうして家へ辿り着いたかまるツきり覚えがなかつたやうなわけでひよつとすると街路樹の枝にでも引つかけて出来た傷かも知れませんか」

司法主任は、頷いて、

「成程、そんなこともありさうだ……しかし、君の耳には傷なんかついてゐないぢやないか。どうして傷だなんていふんだね」

「エツ」

「それは飛沫つちりの血だ」

と、いつて置いて、突然、拳でドスンと卓を叩き

「とほけるな、野郎！そんな甘い世界だと思つてゐるやがるのか」
今まで後に突つ立つてゐた刑事が薄笑ひをしなから近づいてきて

「木谷、警察を遊ばせに來るとはためえも相當太い野郎だ、殺つたのはためえたらう」

こんなことで、たつぷり夕方までおどしつけられたが、木谷にすれば一向身におぼえのないことだから、格別恐いことはなく、顔色も變へずに應待するので、さすがの熟練家達も匙を投げ出してしまつた。

鐵縁眼鏡をかけた學究風なのが一人加はり部屋の隅へ固まつて、ひそひそ聲で、トリンケンフエルゲツセン……とか、トリンケンヒルドとかなんとかドイツ語まじりで話をしてゐたが、間もなく司法主任がこちらへ戻つて來て、なんとも申譯これなかつたやうなテレ笑ひを浮べながら、

「いやア飛んだ見込違ひで、えらいご迷惑をかけましたね。なんともはやお詫びのしようもないやうな次第で……」

といつて、禿上つた頭をツルリと撫で

「格別何もありませんが、お禮のしるしまでに一獻獻じますからどうかひとくち飲つてください、警察の酒なんてえのもの、浮世ばなれがして、ちよつと乙でせう」

警察の仕事は早い。アツといふ間に、仕出屋まがひの小料理がズラズラと並び、まア一つ、とかなんとかいひながら、否應なしに盃をさしつける。

木谷も乙な氣持になつてこれは面白いとばかりに

「ぢや遠慮なく」

と、ひどく落着いて、刑事連を向ふへ廻し、差しつおさへつ、追々大束になつてひツかぶつてゐると、何しろ朝から飲まず食はずだつたので、まだこの位ではと思つてゐるうちに俄にドツと酔つてきた。

突然、木谷の腦裏に思ひもかけない記憶がマザマザと甦つて來た……運轉手の野郎が妙にからんだことをいひやがるから、いざこざがあるなら腕で行かうといふと、小癩にも、やりやしよう、ちやうど、こゝは戸山原だ。二人でどう跳廻つたつて、これで狹すぎるといふこたアねえ。何をツ、で、霜柱を踏碎きながら掴み合つたが、すぐにだらしなく組敷かれ、口惜まぎれに石をひツ掴んで……

頭の血が、えらい勢ひでスーツと足の方へ下りて行くのがわかつた。

司法主任は、ジロリと木谷の顔を眺めて

「どうだ、木谷君、思ひ出したかね？」

木谷は、蚊の鳴くやうな聲で呟いた。

「思ひ出しました。……私が殺つたのに相違ありません」

司法主任はニヤニヤ笑ひながら

「フエリの定説はよかつたぜ、成程、それに違ひない。君が殺つたんだからなア。……それにしても悪い酒だぜ。飲酒忘却症といふやつさ。酩酊してゐる間にやつたことは一切おぼえてゐない。同じ程度に酔ふと、やうやく思ひ出す、恐いもんだねえ。刑期が終へたら酒だけはよすんだなア」

と、宥めるやうな口調でいつてブルンと酒鼻を撫であげた

(了) (「京城日報」昭和十五年一月二日夕刊四面)

「酒の害」について「をめぐって」

探偵小説作家としてのイメージが強い久生十蘭ではあるが、探偵物だけではなく、恋愛小説、ユーモア小説、歴史小説など多様なジャンルの小説を書いた。昭和八年にフランスから帰国し、その後「新青年」を中心に作品活動を行ってきた久生十蘭は、昭和一四年ごろになるとさまざまな雑誌に執筆を求められるようになる。例えば、昭和一四年には「新青年」掲載の作品以外にも、「海豹島」(大陸)二月号、「教訓」(オール読物)四月号、「妖翳記」(オール読物)五月号、「酒祝ひ」(大洋)五月号、「だいこん」(改造)六月号、「墓地展望亭」(モダン日本)七、八

月号、「昆虫図」(ユーモアクラブ)八月号、「贖罪」(オール読物)九月号、「女傑」号(大洋)九月号、「カラス」氏の友情」(オール読物)二月号、「カイゼルの白書」(大洋)二月号、「赤ちやん」(現代)二月号)などを、多様な雑誌に寄せている。ジャンルもまた、諷刺や冒険小説風の作品や、犯罪小説などさまざまである。そして、新聞社としては珍しく、「京城日報」もまた、このような久生十蘭の新境地開拓への挑戦の舞台を提供したのである。

「京城日報」に「酒の害」について」が掲載される昭和一五年の一月にも、「娘ばかりの村の娘達」(新青年)一月号、「白鯨模様印度更紗」(新青年)一月号、「心理の谷」(モダン日本)一月号、「月光と硫酸」(ユーモアクラブ)一月号、「暢気オペラ」(サnder)毎日)一月七日号)などの作品を執筆している。

遊澤龍彦は『久生十蘭全集Ⅱ』(二書房、昭和四五年一月三日)の解説で久生十蘭の短編小説の特徴について次のように述べている。

その一つは、今まで書かれた最もすぐれた久生十蘭論であると思われる都筑道夫氏の文章(桃源社「真説・鉄仮面」あとがき)から借りれば、「極端に苛烈な運命から、逃れようともせず、押しつぶされもせず、生きてゆく男らしさ」のそれである。当然のことながら、ここから限界状況的な異常なシチュエーションの設定、たとえば漂流とか、遭難とか、飢えとか、人肉嗜食とか、殺人とか、

あるいは近親相姦とか、姦通とかいった、しばしば残酷悲惨をきわめたテーマの物語が生まれる。(中略) もう一つのモティーフは、いささか意外の感をおぼえる向きもあるうかと思うが、愛の神秘のモティーフである。交際ざらいと言われ、孤独好きと言われ、人間関係のわずらわしさを一切断ち切つていたかと思われる久生十蘭の作品に、純愛のテーマが執拗に現われているということ、私は何度でも繰り返して強調しておきたいと思う。(太字は引用者)

濫澤の指摘に従うと、「酒の害」については「限界状況的な異常なシチュエーションの設定」の作品群に属するだろうか。「酒の害」について「におけるこのような「シチュエーションの設定」や物語の展開は、久生十蘭のほかの探偵物でもたびたび見られる。特に、久生十蘭というペンネームを初めて用いた「金狼」(『新青年』昭和二年七月号、一月号)では、作品の冒頭で遺産相続の知らせを受けた五人がある酒場に集まり、殺害の現場を目撃する場面から物語が展開される。殺人現場に集まった五人がお互いのことを疑ったり、「警察に協力するのは市民の義務でさ。」(『全集』第一巻、一九二頁)、「すなはち絲満を殺した犯人なのですが、さういふ場合、その人物は、かならず、その現場へやつて来るものなのです。」(二三四頁)のセリフが見受けられるなど、「酒の害」についてとの類似点が多々見られる。

また久生十蘭の創作には作品中に書物の引用がしばしば見られる。例えば、昭和一五年に「新青年」の一月号に発表された「心理の谷」にも、メンデルの『雑種植物の研究』からの引用があり、作品の展開に重要な役割を果たす。「酒の害」についての中でもアンドレアス・ピエルの「犯罪心理学の研究」という書物から引用があり、小説の展開に大きな役割を果たしている。

「京城日報」における探偵小説

「京城日報」には、久生十蘭の作品以外にも、探偵物が少ない。タイトルに「探偵」というキーワードが付いているものだけを挙げてみると、次のとおりである。(なお、漢字は新字体に改めた。以下同。)

- 本田千里 「探偵物語 ダイヤ賊」(大正二年八月一九、二〇、二二日)
- 高田方洲 「探偵小説 火箸千本」(大正二年二月二三、二四、二五日)
- 中尾孤月 「探偵小説 金庫の鍵」(大正二年五月四、五日)⁽⁴⁾
- 甲賀三郎 「探偵小説 現場不在証明」(昭和七年一月二二、二三、二六日)
- 濱尾四郎 「夏のエピソード(3) 犯罪・探偵小説」(昭和七年七月二日)

●馬場孤蝶「探偵小説とギヤングの魔手」(昭和七年一〇月二三日)

●森下雨村「探偵小説 窓から覗く顔」(昭和九年一月三、七、一〇日)

○日)

●木下宇陀児^{マツ}——探偵小説——曲馬団綺譚(昭和一〇年一月三、

五日)

●木々高太郎「探偵小説 極量」(昭和一一年一月三日)

以上のように、「京城日報」には大正末から探偵小説が掲載されていた。昭和に入ってしばらく見当たらなくなっていた探偵小説は、再び昭和七年ごろから「京城日報」の紙面を飾るようになる。このように「京城日報」は、探偵小説や評論を積極的に掲載したが、そればかりではなく、「探偵漫談」のような催しも主催していた。

昭和五年六月二一日の「京城日報」の紙面には、「尖端を行くもの、集ひ」という謳い文句の、「探偵漫談と音楽の夕」というイベント広告が確認できる。日時は六月二六日の午後八時で、場所は京城日報社の来青閣となつている。出演者は「探偵小説家 甲賀三郎氏」、「テノール歌手 黒田進氏」、「ソプラノ歌手 関種子嬢」、「ピアノ伴奏 君島愛子嬢」という顔ぶれである。さらに、イベント翌日の記事には甲賀三郎について、「探偵物漫談界の第一人者、甲賀三郎氏(中略)作家としては江戸川乱歩らと並称せられ、漫談家としては大辻史郎の右に出づる名声を保持する甲賀三郎氏の創作による探偵物を獲得のうまさで大衆に語るのである」と紹介している。また、引き続き今回

の催しについては、「府内においても探偵趣味は漸次高潮し、この方面の小説を記載してゐる月刊「新青年」の売行は他の諸雑誌を圧し、すばらしい成績を収めてゐる、しかし今日まで「探偵漫談会」は府内、否半島に催されたことの先例なく今回が嚆矢であるだけにセンセーショナルな期待を持たれて居るのは無理からぬことである」とその意義を宣伝している。その後も当日の二六日までほぼ連日イベントのプログラムや歌われる歌詞などが広告文と共に「京城日報」に掲載されている。このように盛大に宣伝された「探偵漫談と音楽の夕」、特に当日までの内容が知らされていなかった「探偵漫談」の内容については、二七日の紙面に「朝鮮で最初の探偵漫談——甲賀三郎氏は場も破れるばかりの拍手に迎へられて登壇、まづ支那の馬賊話に初まり、探偵物のトリックを巧なゼスチユアで語り堂を魅する」と一時間とあり、「探偵漫談」の内容と観客からの反応が綴られている。

このような「京城日報」における探偵小説の掲載本数は、前述した内地の地方新聞である「北国新聞」の「年表稿」と見比べてみても、見劣りするものではないことが確認できる。その後、昭和一五年には久生十蘭の「探偵小説 酒の害」について、「京城日報」に掲載されるわけである。

【注記】

1 伊勢良夫(明治三八年〜昭和六二年)は「激流」の他にも、竹田敏彦作「麗人荘」(「京城日報」昭和一三年七月一六日)昭和一四年一月一七日/

全一八〇回)、川口松太郎作「老春」(「京城日報」昭和一六年二月一四日
〜昭和一六年九月一五日/全二二〇回)、山中峯太郎作「東天新生」(「京
城日報」昭和一九年九月一日〜昭和一九年二月三日/全二一四?回)
の挿絵を担当している。『図説 絵本・挿絵大事典』(大空社、平成二〇
年一月二八日、全三巻)によると、伊勢良夫は東京芝赤坂新町生まれ
で、太平洋画会と熊岡絵画道場で学んだ。戦後にはアメリカ軍の肖像画
を主に描き、マッカーサーの肖像画の依頼もされたことがある。しかし、
伊勢良夫が連載小説の挿絵を描いた新聞には、「読売新聞」と「中外商業
新報」のみで「京城日報」の名前は見えない。※「?」は連載全回数が

定かでないことを表す。

2 『全集』の第一〇巻の解題「作者の言葉」(「ココニ泉アリ」)参照。

3 母の病気を治すため、火箸を千本盗んだ息子の話を描いた「探偵小説
火箸千本」は内容から判断すると、全三回分の小説である。しかし、復
刻版『京城日報』には欠号が多く、「中」にあたる二四日の紙面は見るこ
とができない。

4 「金庫の鍵」も四日の「(中)」と五日の「(下)」の紙面しか見ることが
出来ない。

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)